氏　　名		アム セチュン　トニー
学 位 の 種 類		博士（音楽）
学 位 記 番 号		博音第１４号
学位授与年月日		令和４年３月２５日
学位授与の要件		学位規則第４条第１項該当者
題目	学位論文題目	Influences of Industrial Rock in Orchestral Music: Traces of 1980s West Berlin in Magnus Lindberg's Kraft オーケストラ音楽に見るインダストリアル・ロックの影響 － マグヌス・リンドベルイの《クラフト》における 80 年代西ベルリンの痕跡 －
学位論文等 審 査 委 員		（演奏審査）　主　査　教　授　小 林　聡 副　査　教　授　山 本　裕 之 副　査　教　授　福 本　泰 之 副　査　教　授　北 住　淳 （論文審査及び最終試験）　主　査　教　授　小 林　聡 副　査　教　授　東谷　護 外部審査員　教　授　ｴﾄﾞｶﾞｰ･W･ﾎﾟｰﾌﾟ（愛知県立大学）

学　位　論　文　の　要　旨

フィンランドの作曲家、マグヌス・リンドベルイ Magnus Lindberg（1958-）（以下、リンドベルイ）の代表作の一つにオーケストラ曲《クラフト Kraft（1985)》（以下、《クラフト》）がある。その最大の特徴はオーケストラに道路標識や車載部品、ガスタンクなどのファウンド・オブジェクトを打楽器として取り入れたことである。20 世紀初頭から無調音楽が生まれ、自然界に存在するあらゆる音を用いて音楽的実験が試みられるようになった。

《クラフト》も、今や数多くある音楽的実験の一つと言える。しかし、ファウンド・オブジェクトの音色を採用するに至ったのには西ドイツのインダストリアル･パンクロックバンドの影響があったと見られ、オーケストラ音楽とは異なるジャンルの、サブカルチャー音楽から影響を受けた点で、特異な作品であると言える。

1980 年代、西ベルリンのサブカルチャーを牽引していたインダストリアル・パンクロックバンド、アインシュテュルツェンデ・ノイバウテン Einstürzende Neubauten（1980-）（以下、ノイバウテン）は、まさに道路標識や車載部品、コンクリートなどの破壊音を用いた音楽活動を行なっていた。一方、音色を中心とする作曲方法を模索していたリンドベルイは、1984 年に西ベルリンでノイバウテンの音に出会い、感化され、《クラフト》の作曲に至った。作曲スタイルの異なるリンドベルイとノイバウテンだが、その共通点は双方とも第二次世界大戦後、新しいものを生み出そうとする気運が高まっていた

20 世紀に、新たな音楽的実験を試みていたことである。筆者は、リンドベルイに影響を与えたファウンド・オブジェクトの音色が、ナチス政権が崩壊した後の西ベルリンにおいて生み出されたことに着目した。当時、西ベルリンでは戦後の政情不安が青年達の芸術活動にも影響し、独自のサブカルチャーが進化している最中であった。リンドベルイとノイバウテンを繋ぐファウンド・オブジェクトの音色は、まさに 80 年代の西ベルリンという特殊環境から生み出された音であると考えられる。

本論文は、インダストリアル・ロックがリンドベルイのオーケストラ作曲に及ぼした影響について、その社会的、文化的背景を探り、ノイバウテンの音色の影響、その音色を採用したリンドベルイの作曲語法を明らかにすることを目的としている。

本論文は、6 章から構成されている。第 1 章では、ノイバウテン、リンドベルイが出会った西ベルリンの舞台背景、そして 2 人のそれぞれの音楽活動の経歴、作品の特徴について概観した。

第 2 章では、ノイバウテンが属していたサブカルチャーの特性を明らかにすることを目的とし、1960-80 年代の西ドイツにおける青年の社会活動など、オルタナティブな歴史的背景を中心に考察した。

その起源となる第二次世界大戦後の西ベルリンの社会背景について、次の 2 つの事象に着目した。⑴ 60、70 年代の学生運動の暴徒化による政情不安の蔓延、そして⑵ 80 年代、政府の都市再生計画に反対するスクワッター運動（住居占拠行為）である。この 2 つの事象と同時に、政府から独立してユートピア的なコミュニティを形成するムーブメントが生まれたこと、その中で、伝統や主流から一線を画し、アマチュア主義の美学に基づいた「真正な（authenticity）」創作活動を重視するサブカルチャーが発展したことについて考察した。その結果、サブカルチャーの根底に、反ナチスの思想が強く影響していること、サブカルチャーを牽引する代表格であったノイバウテンの音楽活動に与えた影響についてまとめた。

第 3 章では、ノイバウテンとリンドベルイのそれぞれの価値観、影響を与えた思想に注目し、それぞれの創作活動にどのように反映されているのかを論じた。1 節では、ノイバウテンの特徴である身近なものを楽器として用いる演奏方法、また当時のサブカルチャーと同様、彼らも目指していた「真正な（authenticity）」創作活動について、彼らが影響を受けたというウォルター・ベンジャミン Walter Benjamin（1892-1940）の思想、アントナン・アルトー Antonin Artaud（1896-1948）の「残酷劇」の芸術的概念より考察。その結果、社会政治的な背景が、ミュージシャン及びサウンドの誕生にいかに影響を与えているかが明確になった。2 節では、70 年代中頃に保守的なフィンランドの音楽界に属していたリンドベルイが、モダニスト、パーボ・ヘイニネン Paavo Heininen（1938-）に特に影響を受け、その後、大陸ヨーロッパのアバンギャルド音楽の追求、普及活動に至った経緯を述べた。さらに、《クラフト》に至るまでの初期作品の作曲語法に対する考察から、リンドベルイがセリエル音楽から解放され、様々な音楽要素を変容して構成する作曲語法を身につけ、具体音を用いる音楽実験を行うに至った変移について明らかにした。

第 4 章では、ノイバウテンの《クラフト》に及ぼした影響についてより深く考察。1 節では、20 世紀に台頭してきた音楽におけるノイズの解放について注目しつつ、リンドベ

ルイとノイバウテン両者の作品を評価した。その結果、作曲スタイルの異なる両者が 20 世紀のノイズ解放の延長線上にあり、両者が同時代性を共有していることの意義を述べた。2 節ではファウンド・オブジェクトの身体性について検証した。アリストテレスの共通感覚の考え方、つまり聴覚と視覚体験が同時に引き起こされるという概念に基づき、ノイバウテンの演奏方法を考察。この演奏方法が、リンドベルイのオーケストラ会場での空間化にも影響を与え、観客に及ぼす聴覚だけではない視覚的体験を促していることを指摘した。3 節では記号論の視点から、アーティストと素材の相関関係について、ノイバウテンとリンドベルイの比較を行なった。ノイバウテンにとって、楽器として用いた錆びた瓦礫は、戦後の廃墟と化した建物や民衆の暴力的デモを呼び起こすものであり、「捨てられたもの」を用いることで左翼アーティストとしての社会的アイデンティティを表現した。また、ノイバウテンは素材の主目的を破壊し、新しい用途で用いることによって、当時の西ベルリンの社会政治的な時代精神を反映させた。その不協和音の実験は、80 年代の都市の社会的ダイナミズムを象徴する力強いソノリティを生み出す記号論的行為であることを論じた。リンドベルイが西ベルリンで出会ったファウンド・オブジェクトの音は、そうした社会的ダイナミズムが入り込み、もともと書こうとしていた作品のスタイルを変えてしまうほどの強い衝撃をリンドベルイに与えた。しかし、リンドベルイのファウンド・オブジェクトの音色に対する解釈では、社会批判の側面は微妙に排除されている。リンドベルイは音楽的関心に焦点を当てることで、素材の転化を実現していることが明らかになった。最後に、ノイバウテンとリンドベルイの相違点にも着目し、それぞれのファウンド・オブジェクトの取り扱い方を取りまとめた。

第 5 章では、テクスチャー、構造、音響、空間化の枠組みで《クラフト》を楽曲分析した。特に、テクスチャーと音色の展開が全体の構造をどのように発展させているかに着目。その上で、曲全体の構成においてファウンド・オブジェクトの金属音がどのような位置的な意味を持ち、どのような機能性があるのかを論じた。

第 6 章では、インダストリアル・ロックがオーケストラ作品に影響を与えた背景、要因について各章を総括した。アンダーグラウンドのロック音楽と現代音楽は異なる性質、価値観の上に成り立っていて、ノイバウテンとリンドベルイの作曲語法にも決定的な違いがある。

しかし、20 世紀の音楽家としての共通性、リンドベルイが実験的に音色を取り入れていた時期的な要因などにより、インダストリアル・ロックからインスピレーションを受けて、その音色をオーケストラ音楽に組み入れることを可能にしたことを論じた。また何より、その実現の根底には 1980 年代の西ベルリンの社会的ダイナミズムがある。戦後、劇的に変化した価値観、新しい文化を創出した西ベルリンにおける社会的ダイナミズムこそ、リンドベルイに都市の廃棄物を主要な楽器として《クラフト》に投入させ、インダストリアル・ロックの影響力を発揮させたことを結論づけた。

演 奏 審 査 結 果 の 要 旨
本学位申請リサイタルは前半と後半に分かれ、前半では、申請者の過去の作品を聴きながら、博士論文の要旨や、《Zustand》の作曲に至る経緯、作曲者の作品に対する思いが語られた。後半では、《Zustand は》というタイトルの、2 つの楽章からなる、演奏時間

が 30 分に至る長大な作品が演奏された。この作品は、今日一般的に考えられている現代音楽とは趣の異なるものであった。

リサイタルを聴いて、「《Zustand》は興味深い作品」という印象を持った。この作品には、作曲者が長い間ポピュラー音楽に携わってきたこと、ミュージック・テクノロジーに関する高いスキルを持っていること、マルチリンガルであり、アジア、ヨーロッパ、アメリカで生活をしながら様々な文化を体験してきたこと等が、色濃く反映されている。作品は、ヴィオラ、テナー・サクソフォン、パーカッション、テープ（コンピュータで制御される）のために書かれ、演奏の際に、各楽器はアンプリファイされる。この作品を視覚的にも音響的にも強く印象付けているのは、パーカッションとして用いられている、ドラム缶とスプリング・コイルである。このことは、作曲者が強い興味を持っている、インダストリアル・ロックの影響を感じさせる。冒頭でドラム缶が強打され、その後もドラム缶は曲の進行の中で、大きな役割を果たしてゆく。スプリング・コイルは意外に優しく響く。作曲者は「生きることを表現する」ことを考えたと述べているが、心拍を連想させるパルスが用いられ、曲全体を通して絶えず前進して行く大きなエネルギーを感じさせる。

30 分に及ぶこの作品は、様々な様相を呈する。審査員の世代には懐かしいアール・ヴィヴァンで聞こえた音を思わせたり、80 年代のニュー・ウェイヴの要素を感じさせたり、ニ長調の主和音がベートーヴェンの第 9 交響曲を思わせたりする部分もある。全体としては何かに似ているようであるが、やはり個性的である。作曲者の周りにある音楽的素材を怖いもの知らずに自由に駆使しているところは、作曲者の若さから来ていると思う。この作品は、若書きの作品としての魅力もあり、作曲者の音楽を創造する力を十分に感じさせるが、今後の課題がないわけではない。3 人のソリストを用い興味深い音色を作り出しているが、ソリストの一人一人がもう少し名技性を発揮できる部分あれば、演奏者にとってもより楽しい作品になったと思う。また、作品の構成や細かな音の動きにもさらなる洗練味が欲しい。だが、これらは本学位申請リサイタルの価値を低めるものでなく、本学位申請リサイタルは総合的に高く評価できる。

上記の通り、本学位申請リサイタルは、愛知県立芸術大学の博士(音楽) の学位リサイタルとして価値のあるものと認める。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本学位申請論文は、フィンランドを代表する作曲家、マグヌス・リンドベルイ Magnus Lindberg (1958 -) のオーケストラ作品《Kraft》においてファウンド・オブジェクトが打楽器として用いられている点に着目し、その意味するところを明らかにしようと考察を重ねたものである。その際、単なる音楽分析にとどまることなく、《Kraft》が作曲された 1980 年代における西ベルリンの、サブカルチャーの台頭が見られた社会状況を描写し、サブカルチャーの牽引者であったインダストリアル・パンクロックバンド、アインシュテュルツェンデ・ノイバウテン Einstürzende Neubauten がリンドベルイの《Kraft》に与えた影響を解明するため、幅広い視点から考察している。

本学位申請論文の中心となるのは第 5 章であり、ここでは、テクスチュア、構成　音色、空間性に焦点を当て、作品自体を多面的かつ詳細に分析している。譜例と表が効果的に添えられ、レイアウトも適切であり、分析が大変明快で把握しやすくなっている。また、文

章も生命感に溢れ、読んでいると、リンドベルイの《Kraft》が聞こえてくるようである。

本学位申請論文では、独自な視点による着眼点に基づき、「時代の転換期」に登場した音楽について、当時の実態を丹念に追い、さらには実体験者のインタービューも含めて分析されている。英語・ドイツ語を含む数カ国語で書かれた膨大な資料をもとに調査・研究が進められ、本学位申請論文は美しく明瞭な英語で書かれている。本論文にとって最適な研究方法を採用し、説得力のある分析と考察を文章に表すことに成功したのは、申請者がマルチリンガルであるばかりでなく、アジアと欧米の生活文化を体験し、クラシック音楽のみならず、ポピュラー音楽や民族音楽にも造詣が深く、最新のミュージック・テクノロジーを駆使するスキルも持っていることから来ている。このことから考えても本論文は、大変貴重なものであると言える。また、本学位申請論文は、着目したテーマはもちろんのこと、方法、論の進め方においても堅実である点において評価できる。

しかしながら、第５章での記号論的な考察をもう少し細かいレベルまで進められれば、音楽分析が第２章から第４章の内容と明確に結びつき、より完成度の高い解釈に到達できたと思える。とはいえ、本学位申請論文は、説得力のある分析と考察によって《Kraft》の研究に貢献したものであり、総合的に高く評価できる。

上記の通り、本学位申請論文は、愛知県立芸術大学の博士（音楽）の学位論文として価値のあるものと認める。

最 終 試 験 結 果 の 要 旨

本学位申請者は、アメリカの大学で作曲を学んで以来、ポピュラー・ミュージックやコンピューター・ミュージックを中心に、映像の分野にも携わりながら、創作活動を続けてきた。自身の音楽語法と現代音楽の作曲技術をより効果的に統合させ、聴衆を置き去りにしない現代音楽を創作するための方法論を探究するために本学に入学した経緯がある。本学位申請リサイタルで発表された作品における作曲家としての方向性と本学位申請論文は密接にリンクしている。マグヌス・リンドベルイのオーケストラ作品《Kraft》に見られるインダストリアル・ロックの影響を当時の実態を追いながら考察し、ポピュラリティの得られる現代音楽を創造するためのひとつの回答を得ていると思う。本学位申請リサイタルの作品《Zustand》は、《Kraft》の分析からヒントを得た方法論を用いた、個性的で力強い、説得力のある音楽である。本学位申請リサイタルと本学位申請論文は、本学位申請者が、本学の実技系博士後期課程において行った研究をさらに深め、研究者としてまた作曲家として活躍して行けることを強く感じさせた。

以上のことから、審査員全員一致で優秀な成績と認め、合格と判定した。